



# 施設だより

ひこね市文化プラザ ☎26-8601 FAX 26-8602

10月の休館日：5月・13日  
・19日・26日

10月7日(休) 19:00～  
**音楽と人形 一人形師 谷ひろしが生んだ人形と**  
自由 3人の表現者によるハーモニー

10月10日(出) 14:00～  
**ひこね市民大学講座**  
自由 第5講 金子勝さん(慶應義塾大学経済学部教授)

10月25日(日) 18:30～ **劇団四季ミュージカル**  
指定 **「アンデルセン」**  
リハーサル見学会(16:15～)開催決定!  
チケットをお持ちの人が対象です。  
15:40～16:00にご来場ください。

10月27日(火) 19:00～  
**金亀亭第3回狂言・落語コラボレーション**  
自由 **狂言のふりゅう&落語の風流**

11月5日(休) 19:00～  
**名曲の花束 ブルガリア弦楽室内合奏団**  
指定 **ソフィア・ゾリステン&ミラ・ゲオルギエヴァ**

11月11日(休) 19:00～  
**「トミー・キャンベル 河合代介 岡安芳明**  
自由 **トリオ」レコーディング・ライブ**  
-彦根オリジナル・ナンバー発表コンサート-

11月22日(日) 11:45～  
**NHKのど自慢 公開録画**  
ゲスト：森進一、原田悠里  
※出場および観覧をご希望の人は申込みが必要です。  
詳しくは、広報ひこね9月15日号をご覧ください。

12月12日(出) 19:00～ **金亀亭第4回落語ライブ**  
指定 **立川志の輔独演会**

12月20日(日) 14:00～  
自由 **第12回 ひこね市民手づくり「第九」演奏会**

12月24日(休) 19:00～  
**外山啓介クリスマス・ピアノリサイタル**  
☆2007年サントリーホールでのリサイタルが完売。異例のスケールでデビューしたクラシック界話題騒然の超大型新人です。繊細で、色彩感覚豊かな独特の音色を持つ外山が、聖夜に彦根で聴かせます。  
指定 3,000円 【10月4日(日)発売開始】

託児サービス・臨時バスの運行については、公演ごとに異なります。詳しいことは、お問い合わせください

チケットのお申し込み、お問い合わせは  
**チケットセンター ☎27-5200 (9:00～19:00)**

## 彦根城博物館

10月の休館日はありません。  
※10月26日(月)～同29日(休)は展示替えのため、展示室を一部閉室しています。

開館時間 8:30～17:00 (入館は16:30まで)

10月1日(休)～同26日(月)  
**直弼発見!** 巻の9  
**「井伊直弼の茶の湯・好みの道具」**

大名茶人、直弼好みの茶道具を紹介。和歌の素養をいかした道具や、日常道具の「見立て」に直弼の美意識をさぐります。



月夜茶器 (個人蔵)

ギャラリートーク  
**「井伊直弼の茶の湯・好みの道具」**  
10月3日(出) 14:00～15:00  
解説：本館学芸員 小井川 理  
※事前申し込みは不要です。当日、館内講堂にお集まりください。

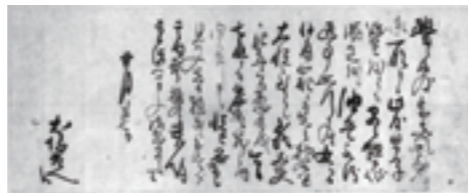
10月30日(金)～11月29日(日)  
**直弼発見!** 特別企画展  
**「政治の時代・井伊直弼と幕末の群像」**

欧米列強国から開国を迫られ、人びとの政治意識が高揚した幕末日本。国の将来をめぐって激しい政争が繰り広げられた直弼の大老政治の様相を、直弼と対立した人びとの視点を交えて紹介します。

ギャラリートーク  
**「政治の時代・井伊直弼と幕末の群像」**  
10月31日(出) 14:00～15:00  
解説：本館学芸員 渡辺 恒一  
※事前申し込みは不要です。当日、館内講堂にお集まりください。

**直弼のころ** 幕末の大老、井伊直弼(1815～1860)は、国政を担う政治家として知られる一方、茶の湯や国学、禅、居合などにひたむきに取り組む、文化人としての面をあわせ持っていました。このコーナーでは、直弼ゆかりのさまざまな作品を集め、その人となりをご紹介します。

9月29日(火)～10月25日(日)  
**井伊直弼書状 犬塚正陽宛て**  
次男井伊愛麿(のちの藩主直憲)の誕生にあたり喜びの気持ちを伝えた手紙。



テーマ展

特別企画展

常設展の名言

# とまきの玉手箱

博物館からのメッセージ



第157回

## 樵夫の道具と直弼の「見立て」

その花生の物語は、木曾の山中で始まりました。

安政3年(1856)5月、井伊直

弼は江戸から彦根へ、参勤交代の帰国の途にありました。中山道を通っての道すがら、木曾の山中で一人の樵夫と出会います。直弼が目を留めたのは、樵夫の持つ鉈。樹皮を巻き付けたその鞆の風情に心惹かれ、樵夫に頼み込んで鞆を手に入れます。後日、鞆は、木曾山中での出会いと直弼自詠の歌を記され、茶道具の花生



鉈鞆花生 (右が表面、左が裏面)

として生まれ変わりました。博物館が所蔵する「鉈鞆花生」(写真)がそれです。

茶の湯の世界では、このように通常茶道具ではないもの、茶道具として作られたわけではないもの、茶道具として用いることを「見立て」と言います。さまざまな道具に茶道具としての可能性を見出す姿勢は茶人ならではのものです。直弼が常に茶人としての視点を保持していたことを物語るエピソードと言えましょう。

では、なぜ、「鉈の鞆」だったのでしょうか。一つの理由には、樹皮を用いた野趣溢れる風情があるでしょう。鞆の下半分には、ごつごつとした質感をそのままに、樹皮が三段に巻かれています。樹木本来の姿を残すさまは、洗練された造形の茶道具にはない、飾らない美を宿しています。

一方、山中の樵夫の持ち物であったことにも意味がありそうです。

古来、中国や日本では、樵夫は仙人、漁夫は漁隠(漁をする隠者)と言われ、ともに世俗を離れて生業をなす隠者とされてきました。漁夫のモデルとしては中国・春秋時代の呂尚(太公望)、樵夫のモデルには前漢時代の朱買臣が挙げられ、政治の表舞台を去り山河に暮らす英傑がイメージされています。こうしたイメージを下敷きに、日本でも室町時代から江戸時代にかけて、漁夫と樵夫を描く絵画が数多く生み出されました。

直弼が樵夫の鉈に目を留めた背景にも、そのような樵夫を隠者と見る意識があった可能性が考えられます。鉈は、山中の木を切り生計をたてる樵夫を象徴する道具と言えるところです。花生に記された七五調の歌には、

ふかき梢の木曾山も  
朧がわざとてこりつるに  
わけつつ入れはおもほえず

かなたこなたのさやかにも  
月のもりくぞ あはれなる  
(梢の深い木曾山でも、樵夫は日々の勤めと木を切り、山に分け入っていく、すると、思いがけずあちらこちらで清らかなも月の光が洩れ来ていた。なんとしみじみと趣深いことだ。)

と詠われています。山に生きる樵夫の生業の中に、思いがけず差しこんでくる月の光。自然の中にこそ真理を見出す隠者のあり方と通じるものがあります。

世俗を離れた隠者としての樵夫を象徴する鉈。その鞆を茶道具に見立てる―世俗にとらわれず、茶の湯の本義を求める茶人直弼の理想が、この一つの花生に込められているのかもしれない。  
(彦根城博物館学芸員 小井川 理)